

ゆとり教育の認識と確証バイアス

○齋藤千佳子・橋本博文
（安田女子大学心理学部心理学科）

目的

ゆとり教育とは、「ゆとりと充実」を掲げて告示された学習指導要領をもとに 1980 年代以降に実施されてきた教育政策の総称である。ゆとり教育としてまとめられる一連の政策の根底には、いわゆる「詰め込み教育」への反省があり、ゆとりある充実した学校生活の実現を目指すというのがゆとり教育の本来の政策の趣旨である。しかし最近では、ゆとり教育を受けた“ゆとり世代”について、そうした本来の趣旨とは関係なく、どちらかというとながティブな意味合いでの認識がなされることが多いように思われる。本研究の目的は、そうしたゆとり教育やゆとり世代の若者たちに対して、学校教育関係者や当のゆとり世代の人たちがどのように考えているのかを実証的に検討することにある。

方法

調査対象者：大学教員 13 名・女子大学生 116 名。

調査内容：大学教員を対象とする調査では、ゆとり教育やゆとり世代に対する大学教員自身の認識について尋ねることを目的としていた。女子大学生を対象とする調査でも大学教員を対象とする調査と同様の質問項目を用いたが、それらの項目に加えてゆとり教育やゆとり世代に対する女子大学生の確証バイアス（すなわち、「大学教員はゆとり教育やゆとり世代に対してネガティブな認識を持っているのだろう」と過度に認識する傾向）を測定することを目的としていた。

分析に使用した質問項目 ゆとり世代の学力の水準（5 項目、 $\alpha=.74$ ）、ゆとり世代の非学力の水準（6 項目、 $\alpha=.80$ ）、「ゆとり世代である自分を恥ずかしく思う」や「ゆとり世代が非難されるのは仕方のない面もあると思う」などの項目で測定されるゆとり世代に対する女子大学生の否定的認識（以下「ゆとりダメ意識」、学生のみ、 $\alpha=.80$ ）、そしてローゼンバーグの自尊心尺度（10 項目、学生のみ、 $\alpha=.81$ ）の得点を分析に使用した。

結果

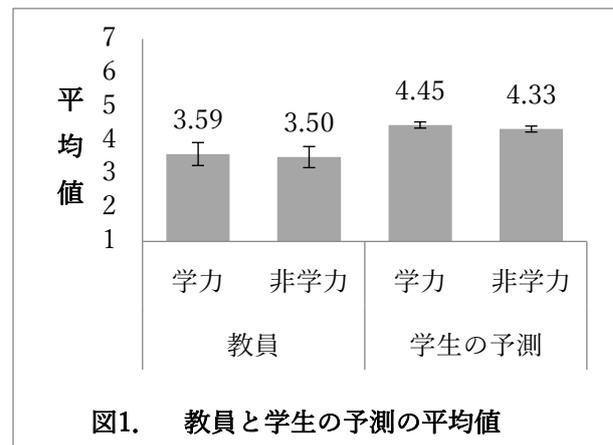
大学教員と女子大学生（の予測）の認識の差 ゆとり世代の学力の水準、非学力の水準の得点について大学教員の回答と女子大学生（の予測）の回

答の間に差が見られるかをまず分析した（図 1）。水準ごとに Welch 検定を行ったところ、学力の水準（ $t(13.80)=2.50, p<.05$ ）、非学力の水準（ $t(13.98)=2.55, p<.05$ ）ともに有意差が示された。

ゆとりダメ意識との相関分析 ゆとりダメ意識とゆとり世代の学力の水準の予測（ $r=.49, p<.001$ ）、非学力の水準の予測（ $r=.49, p<.001$ ）にはそれぞれ正の相関が見られた。また、ゆとりダメ意識と自尊心の間には負の相関が示された（ $r=-.27, p<.01$ ）。

ゆとりダメ意識を目的変数とする重回帰分析

ゆとりダメ意識を目的変数、ゆとり世代の学力の水準の予測および自尊心を説明変数とする重回帰分析を行ったところ、自尊心の主効果は 5% 水準で有意であった（ $\beta=-.21, p<.05$ ）。また学力の水準の予測の効果は 0.1% 水準で有意であり（ $\beta=.49, p<.001$ ）、自尊心よりもゆとりダメ意識をより強く規定する要因となっていた。同様の結果は、ゆとり世代の非学力の水準を説明変数とする重回帰分析においても見られた。



考察

本研究の結果は、ゆとり教育やゆとり世代についての女子大学生の確証バイアスが示されること、そしてそのバイアスが（学生自身の自尊心よりも）当の女子大学生本人のゆとりダメ意識を強く規定する可能性を示すものであった。これらの結果は、大学教員はおそらく否定的にゆとり世代を認識していると思いつくことがゆとりダメ意識につながっていることを示唆する結果である。